

『日葡辞書』における‘Deus (Deos) 〈天主〉’ ‘Christo 〈キリスト〉’の現れ方について (下)

漆 崎 正 人

三 『日葡辞書』における‘Deus (Deos)’
‘Christo’の現れ方の検討

三・一・一 Deus (Deos) ‘Christo’のみで見出し語の
語義全体に対応している場合

『日葡辞書』(1603-4年刊)における‘Deus (Deos)’ ‘Christo’
の用例は、見出し語に対する解説文中に見えるものと、見出し語
の例文自体に、また、例文に対する翻訳文中で使用されているも
のがある。

三・一 見出し語に対する解説文中の ‘Deus (Deos)’
‘Christo’の場合

『日葡辞書』において、見出し語に対する解説文中で用いられ
ている‘Deus (Deos)’ ‘Christo’の用例には、見出し語の語義全
体か、その一義に‘Deus (Deos)’ ‘Christo’のみで対応している
場合と、語義全体か、その一義に‘Deus (Deos)’ ‘Christo’が他
の表現と協同して対応している場合とがある。

『日葡辞書』には‘Deus (Deos)’ ‘Christo’のみで見出し語の
語義全体に対応している例は存しない。

恐らく、当時のキリシタンには‘Deus (Deos)’ や ‘Christo’ を
指す日本語語彙を造語することは、極めて困難なことだったと推
測される。

ロドリゲス『日本大文典』(1604-8年刊)には‘Do modo
de introducir alguns vocabulos nossos na lingua Iapoa de que
carecem & de como se deuen pronunciar.’ (訳：日本の言語が
持たないいくつかの語をわれわれの言語から導入する方法及びそ
の語をどのようにに発音しなければならないかという事に関して)
の項目において、まず、

『*Porque na lingua de Iapam falam algunas palauras pera
explicar muijam cousas novas que o sagrado Euangelho
traz consigo, he necessario ou enuentar de nouo, o que em*

Japam he diffici, ou tomalas da nossa lingua corrompendas conforme melhor cairy, na pronunciagam de Japam ficando como naturais. E porque a lingua Portuguesa, combina muyto com a Japoa, em muytas syllabas & na pronunciagam, comumente della se pode tomar os tuos nomes, posto que tanu hem alguns se tomaram da latina. Estes nomenou sam que pertenaem a Deus, aos sanctos, ou as virtudes & a alguñas outras cousas de que carecem. (訳:『日本語において、神聖な福音、それとともにもたらされるたくさんの不可欠な新しい事物を表わすためのいくつかの言葉が不足しているのであるが、日本語において考案することは難しい。あるいは、私たちの言語から取って、自然な日本語での発音法において、より良く一致するように改めるかである。ポルトガル語は、日本語と非常に多くの音節、及び発音法において一致するので、そういう名詞は一般にポルトガル語から取ることができる。いくつかはラテン語から取られたが、Deus〈天主〉や聖人、あるいは、神徳やその他日本語に不足している事物に関するものである。)(一七九丁表)

と、キリスト教の布教に伴って、日本に新たにもたらされた概念を表わす語を、ポルトガル語やラテン語の発音を日本人が発音しやすいように多少手を加えて取り入れた旨を述べ、そして、その具体的な語例として、最初に「Os que pertencem a Deus、

(Deus〈天主〉にかかわるものとして)挙げてあるものに、

『Deus, Trindade, Padre, Filho, Espirito sancto, Iesus, Iesu Christo, Divindade, Humanidade, Persona, I, Pessoa, &c. (訳:『デウス〈天主〉、トリンダデア〈三位一体〉、パアテレ〈神父〉、ヒイリヨ〈子〉、スピリツサント〈聖霊〉、ゼズス〈イエゼス〉、ゼズキリシト〈イエゼス・キリシト〉、ヂビンダアデ〈神性〉、ウマニダアデ〈人性〉、ペルサウナ〈位格〉、または、ペルソア〈位格〉、など。)(一七九丁裏)と、当然のことながら、Deus、Iesu Christoを含めていることも符号する。

ザビエルは、来日当初Deus (Deos)を「だいにち(大日)」で表現して、説教に用いたが、誤解を生む語であつたために、原語を用いることに改めたことが知られている。

なお、キリシタン用語的な語として翻訳造語された語の一例として、「ゆびがね(指金)^{註2}」がある。

三・一・二 Deus (Deos) Christioのみで見出し語の

一義に対応している場合

『日葡辞書』の当該見出し語の一義に「Deus (Deos) Christioのみで対応している項目は、^{④5}Tentei (天帝)だけである。

^{④5}Tentei (天帝^{テンテイ})の項目では、第一義は(国王)であるとし、

第二義として〈Deos〉が拳がっている。この示し方は、「天帝」は、日本では通常〈国王〉を意味しているが、キリシタンの間では〈Deos〉の意で用いることがあるということであろう。

三・一・三 Deos (Deos) 〳 Christo が他の表現と協同して
見出し語の語義全体に対応している場合

『日葡辞書』において、見出し語に対する解説文中で、Deus (Deos) 〳 Christo が他の表現と協同して語義全体に対応している場合は、Deus (Deos) 〳 Christo が、文頭にはなく、文中にある場合に限られる。

三・一・三・一 Deus (Deos) 〳 Christo が
文中にある場合

『日葡辞書』の当該見出し語の全体に、Deus (Deos) 〳 Christo が文中にあつて他の表現と協同して対応している項目は、③Aure (アハレ) 〳 ⑤Benzaiten (弁財天) 〳 ⑥Maximaxi, su, xita (マシマシ、ス、シタ) 〳 ②Negacuua (願ハクハ) 〳 ②8Sonxu (尊主) 〳 ③0Tautai (託胎) 〳 ③6Tencai (天戒) 〳 ③7Tencan (天鑑) 〳 ③9Tenchu (天忠) 〳 ④0Tenguen (天眼) 〳 ④1Teni (天威) 〳 ④2Tenmei (天命) 〳 ④3Tenson (天尊) 〳 ④6Tentegi (天敵) 〳

④7Tento (天道) 〳 ④8Tenixin (天心) 〳 ④9Tenyacu (天約) 〳 ⑤0Tegiden (的伝) 〳 ⑤1Tonayexinau, ô, ôta (唱へ失ヒフ、ウタ) 〳 ⑤2Xonio (声明) 〳 ⑤4Xonio (称名) 〳 ⑤5Xoran (照覧) 〳 ⑤8Itai (二体) 〳 ⑤9Qnji (勤仕) 〳 ⑦0Tengan (天眼) 〳 ⑦1Tenvn (天運) 及び Raicô (来迎) の二十七項目である。これらのうち、Deus (Deos) または Christo が、共通性を有すると見做されて併記されるものがある場合と、単独の場合とがある。単独の場合は、③Aure (アハレ) 〳 ②0Negacuua (願ハクハ) 〳 ②8Sonxu (尊主) 〳 ③7Tencan (天鑑) 〳 ④0Tenguen (天眼) 〳 ⑦0Tengan (天眼) 〳 ⑦1Tenvn (天運) の七項目である。いずれも、Deus (Deos) が単独の例で、Christo の単独の例はない。③、②0は、キリシタンの立場から、祈りのことばを説明したものである。②8は、「そんしゅ (尊主)」がキリスト教の教会内で Deos について使われる語であることを述べている。少なくとも、室町期には、国内文献で使われることはなかったと思われる。③7、④0、⑦0、⑦1は、国内文献にも使用例が認められるので、キリシタンの用語としては、Deus (Deos) の関わりで規定される語であることとを述べたものと解される。

Deus (Deos) 〳 または Christo が、共通性を有すると見做されて併記されたものがある場合は、⑤Benzaiten (弁財天) 〳 ①6Maximaxi, su, xita (マシマシ、ス、シタ) 〳 ③0Tautai (託胎) 〳 ③6Tencai (天戒) 〳 ③9Tenchu (天忠) 〳 ④1Teni (天威) 〳

④2 Tennei (天命^{テンメイ})、④3 Tenson (天尊^{テンソン})、④6 Tenteqi (天敵^{テンテキ})、
 ④7 Teniō (天道^{テンダウ})、④8 Tengin (天心^{テンシン})、④9 Tenyacu (天約^{テンヤク})、
 ⑤0 Tregiden (的^{テキ}云^{ウン})、⑤1 Tonayevxinai, ō, ōta (唱^{ナウ}失^シヒ^フ、ウ
 タ)、⑤3 Xōmō (声明^{セイメイ})、⑤4 Xōmō (称名^{セイメイ})、⑤5 Xōran (照覽^{テウラン})、
 ⑤8 Ittai (一体^{イチタイ})、⑤9 Qinqi (勤仕^{キンシ}) 及び Raicō (来迎^{ライイカウ}) の二〇項目
 である。これらのうち、キリスト教上の存在という点で併記され
 ているのは、⑤0、⑤3、⑤4 及び Raicō (来迎) の四項目である。
 ⑤0 及び Raicō (来迎) では、Christo (キリスト) と Apostolos
 (使徒) が併記され、⑤3、⑤4 では、Deos (Sanctos (聖人) が併
 記されているので、これも、Deus (Deos) や Christo などの
 の関わりで、キリシタン用語として扱われていた語と思われる。
 これらのうち、Deus (Deos) と儒教的造物主 (ceo) の併記さ
 れているのは、③6、④2、④3、④6、④7、④9 の六項目である。そもそ
 も、「てん(天)」などが、キリスト教的な意味に取りなして使っ
 たものが少なくないので、儒教の意味とキリスト教の意味が併記
 されるのが自然であった。異教を含めた宗教という共通性からは、
 ⑤、③0、⑤1、⑤5、⑤8 の五項目である。⑤、③0、⑤5 では、神仏に関
 して言われることが、キリスト教にも適用できるという指摘であ
 る。⑤1 は、Deos が「その他聖なるもの」と併記されている。⑤8
 では、Deos' Anjos' almas' Camis' Fotoques の順になっ
 ている。これらのうち、キリスト教上の高位の存在と高貴・高位の
 存在という点で併記されているのは、①6 Maximaxi, su, xita (マ

シマシ、ス、シタ)、④1 Ten-i (天威^{テンキ})、④8 Tengin (天心^{テンシン})、⑤9 Qinqi
 (勤仕^{キンシ}) の四項目である。①6 又は、Deos' sanctos' pessoas no-
 bres (高貴な人) が併記されている。④1、④8、⑤9 又は、Deos'
 Rey (国王) が最高位という共通性で併記されている。

三・一・四 Deus (Deos) Christo が他の表現と協同して

見出し語の一義に対応している場合

『日葡辞書』の当該見出し語の一義に、Deus (Deos)、
 Christo が他の表現と協同して一義に対応している項目は、
 ⑦ Cannō (感納^{カンナウ})、③3 Tamuge, uru, eia (手向^{テウカウ}ケ、クル、ケタ)、
 ③5 Ten (天)、③8 Tenchocu (天勅^{テンチヨウ})、④4 Tentacu (天託^{テンタク}) 二例、
 ④5 Tentei (天帝^{テンテイ}) の六項目七例である。⑦では、「かんなう(感
 納)」が、神仏の行為を指す語であるとしたうえで、Deos や
 Sanctos (聖人たち) にも適用できると述べている。③3 では、仏
 に対して行われる行為であるが、Deos にも適用されるとしてい
 る。③5 では、「てん(天)」が儒教的造物主を指す語から Deos を
 指す語にも転じたとしている。③8 では、国王に関わる事柄から、
 Deos に関わる事柄をも指すこともあると述べている。④4 では、
 第一義、第二義とも、儒教的造物主に関わる事柄を指す用法から、
 Deos に関わる事柄を指す用法にも転じていることを述べている。
 ④5 では、国王を指す語が、Deos も指すことができることを指摘

している。

三・二 見出し語についての例文中の Deus (Deos) Christo の場合

『日葡辞書』において、見出し語についての例文中で、Deus (Deos) Christo が用いられている項目は、⑥Cago (加護) ⑨Fempô (返報) ⑪Guinni (吟味) ⑫Iôten (上天) ⑬Iuso-cu (充塞) ⑭Macaricomuri, u, utta (罷り蒙り、ルッタ) ⑮Mandocu (万徳) ⑰Motte (以テ) ⑱Naguevchi, tçu, utta (擲チ、ッ、ッタ) ⑲Naixô (内証) ⑳Qibucu (帛服) ㉑Qu-an (棺) ㉓Sacu (作) ㉔Sacuno mono (作物) ㉖Sonaye, uru, eta (備へ、ユル、クタ) ㉗Songiô (尊敬) ㉘Tacutai (託胎) ㉙Taixi, suru, ita (対シ、スル、ンタ) ㉚Tamai, o (給ジョ、ン) ㉛Tucuri, u, utta (作リ、ル、ッタ) ㉜Variqi (腕力) ㉝Voboximeixi caye, uru, eta (思シ召シ換へ、ユル、クタ) ㉞Vogo (擁護) ㉟Vomotte (ヨ以テ) ㊱Vqenaxe, suru, eta (受け合せ、スル、セタ) ㊲Vxcuxi (写シ) ㊳Xingon (親近) ㊴Xinra manzô (森羅万像) ㊵Xinyô (信用) ㊶Xosan (称赞) ㊷Yenman (円満) の三二項目三二例である。これらのうち、⑥⑨⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿の二

七項目二七例では、Deus (Deos) が用いられており、⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿の五例では、Christo が用いられている。㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿では、Deus と Christo とが用いられているが、同一の例文ではない。Deus は信仰の対象として、Christo は主体的存在として表わされている。Christo の現れ方は、その生死に関することなど、信者に近い存在という扱いになっていると思われる。一方、Deus (Deos) の方は、全能の絶対的存在である信仰の対象であることにより、信仰の必要性や讃嘆の表現に現れている。

なお、見出し語についての例文中に、Deus (Deos) Christo が現れている場合、概ね待遇表現を伴っている。例文において、Deus (Deos) に対する尊敬表現と Deus (Deos) を受け手とする謙譲表現がともに見られるのは、⑭の「御罰」、「罷り蒙ル」、⑯の「御善徳」、「称赞仕ル」だけである。例文において、Deus (Deos) を受け手とする謙譲表現が無く、Deus (Deos) に対する尊敬表現が見られるのは、⑥の「御加護」、⑨の「御主」、御返報」、「ナサセラルル」、⑪の「御事」、⑬の「充塞シマシマス」、⑮の「御主」、備ハリ給フ」、⑲の「御内証」、㉑の「御作」、㉓の「備へ給フ」、㉛の「造リ給フ」、㉜の「造リ給フ」、㉞の「御腕力」、㉟の「御擁護」、㊱の「御名」、㊲の「御主」、「御写シ」、「造リ給フ」である。一方、例文において、Deus (Deos) に対する尊敬表現が無く、Deus (Deos) を受け手とする謙譲表現だけが見られるのは、⑬の「御奉公」、㉑の「帛服シ

奉^{タテマツ}ル、^{②⑦}の「尊敬^{ソウケン}仕^シル」、^{⑥⑩}の「親近^{シンキン}仕^シル」、^{⑥②}の「信用^{シヨウヨウ}シ奉^{タテマツ}ル」である。次に、例文において、Christo についての待遇表現が現れるのは、尊敬表現に限られる。^⑫の「御上天ナサレタ」、^⑦の「御名^{ミナ}」、^{②②}の「御棺^{ミツツ}」、^{③⑩}の「御託胎^{ミツタイ}ナサレタ」、^{③①}の「対^{タイ}セラレ」「対^{タイ}シ給^{タマ}ヒ」である。次に、見出し語についての例文中に、Deus (Deos) Christo が現れていながら、両者に待遇表現が用いられていないのは、^{⑤④}の「善人^{ゼンジン}タチハ世界^{セカイ}ヲデウス^{デウス}Deos〈天主〉ニ思^{オホ}シ召^メシ換^カヘラレタ」、^{⑥⑦}の「Deus〈天主〉ハ諸善^{シヨゼン}円満^{エンマン}ノ体^テナリ」のみである。^{⑤④}の場合、そこに現れている待遇表現は、「思^{オホ}シ召^メシ換^カヘラレタ」の尊敬表現のみで、その動作主体は「善人^{ゼンジン}タチ」で、動作の受け手になるDeos〈天主〉のための謙讓表現が用いられていない。^{⑥⑦}の場合、「Deus〈天主〉ハ諸善^{シヨゼン}円満^{エンマン}ノ体^テ」というのは、Deus〈天主〉の本質の表現なので、待遇表現が必要ないということとで省かれていると考えられなくもない。

三・三 見出し語についての例文の翻訳文中・説明文中の Deus (Deos) Christo の場合

『日葡辞書』において、見出し語についての例文の翻訳文中・説明文中で、Deus (Deos) Christo が用いられている項目は、
 ①Ate, iguru, eta (充^アテッル「テタ」) ②Ato (跡^{アト}) ④Bachi

(罰^{バチ}) ⑧Dôgin (同塵^{ドウジン}) ⑨Fempô (返^{ヘン}報^{ポウ}) ⑩Friome, uru, eta (弘^{ヒロ}メ、ムル「メタ」) ⑪Guimmi (吟味^{ギンミ}) ⑫Jôten (上天^{シヤンテン}) ⑬It-socu (充塞^{ジュウソク}) ⑭Macaricômuri, u, utta (罷^{マカ}リ蒙^{モウ}リ「ル」ッタ) ⑮Mandocu (万徳^{マンデク}) ⑯Motte (以^イテ) ⑰Naguevchi, igu, utta (擲^{ナゲ}チ、ッ「ッタ」) ⑱Naixô (内証^{ナイシヨウ}) ⑲Qibucu (帛服^{ヒツク}) ⑳Qü-an (棺^{クワン}) ㉑Sacu (作^{サク}) ㉒Sacuno mono (作^{サク}ノ物^{モノ}) ㉓Somu-gi, qu, iia (背^{ソム}キ、ク「イタ」) ㉔Sonaye, uru, eta (備^{ソナ}「ユル」タ) ㉕Sonqio (尊敬^{ソウケン}) ㉖Sôxin (喪身^{ソウシン}) ㉗Tacuai (託胎^{タクタイ}) ㉘Taixi, suru, iia (対^{タイ}「スル」シタ) 三例 ㉙Tamai, ô (給^{タマ}「フ」) ㉚Tucuri, u, utta (作^{ツク}リ「ル」シタ) ㉛Tencan (天鑑^{テンカン}) ㉜Tennei (天命^{テンメイ}) ㉝Varigi (腕力^{ワツリキ}) ㉞Vmareai, ô, ôta (生^ウ「レ合^アヒ「フ」ウタ」) ㉟Voboxinexi caye, uru, eta (思^{オホ}シ召^メシ換^カヘ「ユル」タ) ㊱Vôgo (擁護^{ヨウゴ}) ㊲Vomotte (ヲ以^ヨ「テ」) ㊳Vgeauxe, suru, eta (受^ウケ合^{アヒ}セ「スル」セタ) ㊴Vqelamochi, igu, ota (受^ウケ保^ホチ、ッ「ッタ」) ㊵Viguxi (写^{ウツ}シ) ㊶Xin-gon (親近^{シンキン}) ㊷Xinra manzô (森羅^{シンラ}万像^{マンザウ}) ㊸Xôsan (称赞^{シンゼン}) ㊹Yemman (円満^{エンマン}) 及び Fôdan (法談^{ホフダン}) の四一項目四二例である。三・二で取り上げた、見出し語についての例文中で、Deus (Deos) Christo が用いられている項目と大部分重なる「それらの間での意味的不整合性は殆どない」。

ただし、①、②、④、⑧、⑩、②⑤、②⑨、④②、⑤③、⑤⑧及び Fôdan (法談) の一一項目では、例文自体には Deus (Deos) Christo

の語は存しないが、訳の段階で加えられている。また、これらのうち例文には、⑩の「御掟」^{ゴオキヤ}、⑭の「御作ノ物」^{ゴサツモノ}、⑮の「御掟」^{ゴオキヤ}、⑮の「御掟」^{ゴオキヤ}、及び Fodan (法談) の項目の「御掟」^{ゴオキヤ} の尊敬表現があり、①の「御奉公」^{ゴオウコウ} の謙讓表現があつて、キリシタンにとっては Deus (Deos) を強く想起させる文脈になっている。恐らく当時の日本語表現としては、行為の主体などの明示をしない表現の方が一般的だったということが関わつていよう。他方、⑥Cago (加護)^{カゴ}、⑫Xinyō (信用)^{シンヨウ} の項目では、例文はあるものの訳文は存しない。⑥では、例文の Deusno (デウスノ) の部分が訳文では、diuino〈神の〉という普通語が当てられ、⑫では、例文 Deusno Xinyō xlatematcuru (デウスヲ信用シ奉ル)^{デウスヲシンヨウシタマフ} に訳文自体が付されていない。⑫では、訳文を付け忘れたか、訳文を添える必要を認めなかったのかは現時点ではわからない。

四 おわりに

以上、『日葡辞書』における、Deus (Deos) 〈天主〉、Christo 〈キリスト〉の現れ方について検討してきた。用例から見れば、圧倒的に Deus (Deos) が Christo よりも多く現れている。しかも、Christo が Deus (Deos) と併称されている場合も確認できなかった。

Deus (Deos) 、Christo が見出し語の例文中に現れている場合

ほとんど待遇表現が伴われており、両者に対するキリシタンの尊崇の念が具体的表出されているが、Christo の現れ方は、その生死に関することなど信者に近い存在という扱いになっていると思われるのに対し、Deus (Deos) は、全能の絶対的な存在であるということにより、信仰の必要性や讃嘆の表現を積極的に用いていると思われる。

注1 土井忠生「十六・七世紀における日本イエズス会布教上の教会用語の問題」(『キリシタン研究』第十五輯・一九七四年)

注2 拙稿(「ゆびまき」から「ゆびがね」へ—キリシタン資料における〈指輪〉を意味する語の特異な現れ方などをめぐって—『藤女子大学国文学雑誌』第45号・一九九〇年九月)

注3 前稿『日葡辞書』における、Deus (Deos) 〈天主〉、Christo 〈キリスト〉の現れ方について(上)に漏れがあった。

Raioç. Qitari mucô. Vinda, ou aparição de Amida, ou outro Fologue a receber as almas. Pode se accommodar esta palavra a Deos & Anjos. (訳: 来迎。来タリ迎フ。阿弥陀あるいは他の仏が魂を迎えに来る、あるいは現れる。このことばは Deus 〈天主〉や Anjos 〈天使〉に適用できぬ。)

注4 森田武『日葡辞書提要』（一九九三年刊・清文堂出版）

三四〇ページ。

注5 前稿『日葡辞書』における、Deus (Deos) 〈天主〉、Christo 〈キリスト〉の現れ方について（上）」に漏れがあつた。

Fôdan. *Pregação da lei.* ¶ Fôdanuo suru. *Pregar a lei.* Apostolo tachua govoqiteuo gofôdan nasareta. *Os Apostolos pregarão a lei de Deus.* (訳：法談。教えの説教。『法談ヲスル。教えを説教する。』 Apostolo タチハ御掟ヲ御法談ナサレタ。Apostolo 〈使徒〉たちは Deus 〈天主〉の教えを説教した。)

〈うるしちき まちと／本学教授〉